

山本勘助住家の段

母 越路

女房 お種

慈悲 藏

妻 唐織

倅 峰松

横 藏

山 賤

同

物語りの段

慈悲 藏

(後に直江山城守)(後)

横 藏

母 越路

前段に同じ。

木綿荒縞の着付、黒襟に白絞りの

繻子、土器帯

荒縞木綿の着付、胴着黒襟、木綿

輕衫

木綿縦縞の着付、黒襟に胴着、木

綿輕衫

藏(前)淺黄縞子石持の着付、緋縮緬蛸

絞りの襦袢、黒襟に黒帶

紋りの襦袢、黒襟に黒帶

袴

草色縞子の着付、熨斗台付、

赤地織物の襦袢、鍔金蛸絞りの襦

袢、黒縞子の巾着帶、

景勝上使の段

長尾 謙信

長尾 景勝

關 兵衛

花造り 蓑作

十種香の段、狐火の段

武田 勝頼

八重垣 姫

腰元 濡衣

長尾 謙信

白須賀 六郎

白綸子半腰の着付、胴着白麻の襟

茶金の織物の鬼衣、八藤の指貫、

紺金の丸紬

白織物の着付、胴着、白麻の襟、

紺金の袴

茶木綿石持の着付、黒襟に胴着、

鼠黒縦縞の輕衫、唐草模様様のデ

チ(袖無)

淺黄小紋の着付、胴着黒襟、黒縞

子の帶

十種香の段、狐火の段

武田 勝頼

八重垣 姫

腰元 濡衣

長尾 謙信

白須賀 六郎

長尾 謙信

白須賀 六郎

白須賀 六郎

紅梅縞子熨斗目の着付、胴着白麻

の襟、紫織物の袴

緋緞、縫振袖の着付、同じく打掛

下衣裳白統の襟、紺ハチの帶

白火玉付の着付、下衣裳白統の襟

黒縞子縫の帶

草柳縮緬蝦夷鴉の着付、下衣裳白

統の襟、茶金の帶

前段に同じ

紺金袖無四天、白金の鐵砲、胴着

白麻の襟、栗革金の丸紵、
赤地織物の袖無四天、紺金の鐵砲

黒襦子縫の丸紵

同 同

梅川 忠兵衛 戀飛脚大和往來

戀女房染分手綱

道中双六の段、重の井子別れの段

調 姫 赤襦子縫の着付、同じく打掛、赤

襟に胴着、紅梅綸子の帶、

踊 子 草柳紋付の着付、胴着赤襟、黒襦

子縫の帶

腰 元 お 福 藤模様振袖の着付、下衣裳白紵の

襟、赤地金の帶

重 の 井 赤襦子の着付、下衣裳白紵の襟、

茶金の打掛、紺金の帶

本田彌三左衛門 緋緞子の着付、同じく羽織、同じ

く野袴、胴着赤襟、

馬 方 三 吉 淺黄襦子雁木の着付、赤縮緬の鐵

砲、黒襦子の胸當、(丸に㊦)

茶木綿の三尺帶

宰 領 縞の着付、胴着白麻の襟、白博多

摺帶

新口村の段

忠 三 女 房 黄縞の着付、下衣裳紫の襟、黒襦

子の帶

八 右 衛 門 縦縞の着付(淺黄石持)胴着黒襟、

土器帶かはらけ

古 手 買 詰

龜屋 忠兵衛 黒縮緬裾模様の着付、伊豫染の下

衣裳、淺黄の襟、博多摺の帶

傾 城 梅 川 黒縮緬裾模様の、下衣裳に傾城襟、

白博多摺の帶

水 右 衛 門 荒縞の着付、胴着黒襟、土器帶

傳 が ば 木綿小紋の着付、下衣裳茶の襟、

焦茶の帶

藤 治 兵 衛 木綿飛白の着付、胴着黒襟、土器かはらけ

帶

置 頭 巾 鼠の紋付の着付、小紋の羽織、黒

襟に黒帶

針立の道庵 黄八丈の着付、茶紬の被布、黒襟

に黒帯

親 孫右衛門 鼠無地の着付、胴着黒襟黒帯、小

紋の羽織、茶色の肩衣

捕手 小頭 黒の毛襦子の着付、胴着白麻の襟

縦縞、博多の袴

壇浦兜軍記

阿古屋琴責の段

秩父庄司重忠 白襦子熨斗目着付、胴着白麻の襟

岩永左衛門 黒縹の着付、胴着袴襟、赤地八枚

の袴

榛澤六郎 萌黄草柳熨斗目の着付、胴着白麻

の襟、草柳緞子の袴

阿古屋 赤胴着の着付、下衣裳傾城襟、黒

襦子扇模様の打掛、黒襦子の廻帶

水 奴 黒木綿奴衣裳、黒襟に胴着、茶の

デンチ（袖無）だんぢ 袴だんぢ 帯

（文責岩永）

文樂今昔

木谷蓬吟

◇…私は小學生時代からよく文樂の樂屋へ遊びに行つたもので、名人玉造から金時のまさかりを買つて飾しがつた記憶がいまだに消えない、その後、日露戦争に召されるまで、殆ど興行毎に文樂へ通つたものだ。

◇…その頃の太夫には、一人々々異なつた特色を持つた人が、少くとも五六人はあつた。藝の上手下手よりも、理窟に合ふ合はぬ

よりも、聴き終つてから、家へ歸つてからも、何か知らぬが印象に残るものがあつた。楽しい思ひ出と云つたものがあつた。文樂の戻りを臘月夜かななど駄句つたものである。

◇…三味線にも名人が多かつたらしいが、未熟な耳には惣じて程かに聞えてゐた。たと圓平の恐らしい撥の唸りに肝を冷したのとだけは覚えてゐる。人形遣ひにしても、ココと云ふところは非常に力を傾けて遣つたが、あとは餘り目立つた演技は見せなかつた。太夫の語りに應じて人形は人形らし

く、これを本物の人間に近く如實に見せようなどとは思つてゐなかつたらしい。

◇…要するに今の文樂人は、太夫も三味線も人形も、全面的に尖つた神經を働かしてゐるのではないか、隅々へはよく氣がつくがそれだけに餘裕がない、ちやうど餘白のないペタ一面の繪を見るやうな感じである。餘白と云ふものゝ味を忘れてゐるのではないか、餘りに空想に缺けてゐると思ふ。しかし是れは近頃の文樂をたまにしか観かない私の錯覺であるかも知れない。

（五月七日東京新聞）